（発行）R5.1.30

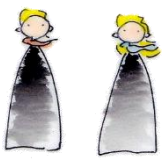
立てる。

初任者研修応援号「響（とよ）む」＠東信教育事務所だより

世の中には、正解と呼べることの方が
少ないものです。だから迷うことは日常で、
私たちは惑わされます。

それでも、
私たちはいつもいつも、迷い、選び、
幾通りの誤りを重ねても、
常に力強く決断しているのです。

初任者として学んできた一年間が、
もう少しで終わります。



Style.1

見通しは、
子供と共に。
互いのために。

小学校　山本 優夏　先生

「初任研で出会った仲間の実践から、自分の考え方を見直してみました」
　山本先生は、緻密な計画と周到な準備を整えて立つ。それでも子供は予想と見通しの枠を超えていく。そうやって重ねた毎日は、予想と見通しが、誰の何のためのものなのかを考えさせてくれた。子供の発想と思いを受けとめて、子供と共に見通しを立てることが、今は自身の余裕にもなってきている。

Style.2

いつも、
機嫌良くありたい。

中学校　日野 夏樹　先生

「機嫌良くしていられれば、どんな時であっても、最後は笑顔に戻れるんです」
　日野先生はご機嫌でとにかく明るく立つ。でも最初からそうだったわけではない。今でも、余裕がなく生徒に声をかけられていなかった最初の自分を猛省している。すべては、生徒が明るく学校生活が送れるように自分をつくり変えてきた。簡単なことではないけれど、そうやって、なりたい自分に近づこうとしている。

－壁面掲示の工夫はどのようにしているのですか？

一年生なので、算数と国語の時数が多いです。特に授業時間では定着が難しいひらがなや漢字は、壁面の高いところに大きく掲示して、いつも目に触れるようにしています。

低いところは個人の掲示物で、頻繁に更新して、じっくりと見たり読んだりできるように目の高さにしています。実はここは整列する場所で、全員揃うまでは掲示物を見て待っていられるようにしています。

日直で教室を回るときに、参考にさせてもらっています。

－子供たちからはどんな反応がありますか？

貼り替えればすぐに
気づいてくれます。
あれ貼ったね～って。

－担任と副担の両方を経験してみていかがですか？

講師のときは副担でした。その時、担任をしていた先輩から「とにかくそこに居てくれ」と言われました。いつか担任をするのだから、いろんな担任の姿を見て吸収することが、必ず今後に生きるのだからと。

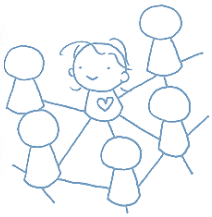
今は担任ですが、副担の時とのギャップは大きいですね。見えている景色が違ういうか。でも、「自分のクラス」という言い方してしまうので、そういうところは良くないと思っています。つい、他クラスと比べた見方をしてしまうんです。

－それは、どうやって乗り越えたのですか？

それは越えてません。
まだまだなんです。

向き合い、その後、同じ方を見つめて立つ。

課題を共に。OJT研修。



初任研メンター方式では、OJT研修として、初任者が、所属する学年や教科会のみならず、特設委員会や係会、各種研究部会等を計画的に渡り歩いて研修をしながら、多くの先生方と関わり学び合える機会を設けています。

Style.3

小学校　西澤 亮太　先生

【初任研メンターチーム】

メンターリーダー
授業づくり担当
生徒指導担当
学級づくり担当
研修担当

西澤先生のチームは、学年、性別、年齢層、係分担、経験年数、得意分野など、多岐にわたる７名で構成されています。

「“振り返り”って、そもそもどういうものなのか。ただの感想にも見えてしまって、あまり実感が得られなくて」

この日のOJT研修には、校長先生と教頭先生もゲスト参加。西澤先生と研修担当の先生から提供された議題を中心に討議します。議題は事前にメンターリーダーに届けられ、メンバー共通の課題として、テーブルの中央に置かれました。

“振り返り”。わかっているようでいて、なかなか難しい話題です。若手の一人が口火を切って、現在進行中のチャレンジを紹介しました。

すると、今度は教頭先生が低学年で取り組んだ方法を語ります。そこから全員でアイディアが出されていくうちに、

「何が実現できればいいのかで考えれば、方法はいろいろありますね」

「その子にとっての振り返りってなんだろうって考えていて…」

と、振り返りの方法からその目的へと、討議の焦点が定まっていきました。そして、

「学習課題が据わっていたかは重要ですね…」

と、研究主任は自身が進める重点研究へ考えを広げました。初任者が抱く課題は、私の中にもある課題。そう自覚して求めるOJT研修は、初任者と共に自身を磨く時間になっています。

さて、ひと汗かいて“振り返り”については一段落。存分な討議によって、この時点でも結構充実。

「じゃあ…次の話題は“主体的”についてですけど…、これもまた深いですね…」

というリーダーの微笑みに、思わず次の白熱討議に備えてメンバーの肩にぐっと力が入る。

足元を見つめる。そして、目指す場所へ向かう。

自己課題を追求する。

Style.4

それは、
自分を鼓舞するもの。

特別支援学校　藤巻 嵩寛　先生

「この生徒も、あと二年もすれば社会に出るんだなと思うと…」
　担当する生徒への責任を感じる中で、自分の中に自然と湧き出てきたような課題。それは、その生徒にとって、自分でできる行動範囲が広がること。できる作業の幅が増えること。そして、できれば、自分の考えや気持ちを伝える手段として端末が使えるようになること。これは、藤巻先生自身の自己課題以上に、生徒への願い。そして、それを掲げて自分を奮い立たせている。

　初任者研修に位置づけられている自己課題に係る研修は、自分で決めて自身に課すものです。それは、教師として変わり続けていくためにも大切な意味があります。

Style.5

２年目の先輩　小学校　石井 加恵　先生

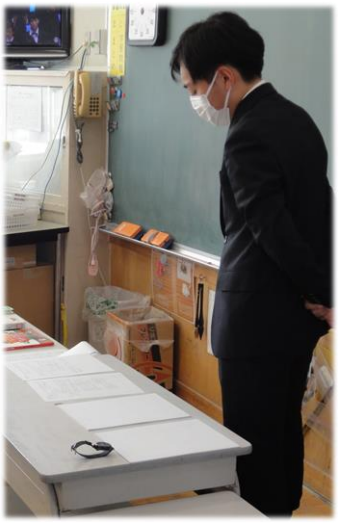
「初任者としての研修を終えて振り返ると、やっぱり大事な時間だったと感じました。はじめは講師経験を土台にしてきたところもありましたが、今は完璧を求めるのではなく、余裕をもって、目の前の子供たちの気持ちに合わせて考えるように変わってきた実感があります」

教師と児童の信頼関係は，日ごろの人間的な触れ合いと児童と共に歩む教師の姿勢，授業等における児童の充実感・成就感を生み出す指導，児童の特性や状況に応じた的確な指導と不正や反社会的行動に対する毅然とした教師の態度などを通じて形成されていくものである。その信頼関係をもとに，児童の自己開示も高まり，教師の児童理解も一層深まっていくのである。

小学校学習指導要領解説 総則編

教師と生徒の人間関係においては，教師が生徒に対してもつ人間的関心と教育的愛情，生徒が教師の生き方に寄せる尊敬と相互の信頼が基盤となる。教師自身がよりよく生きようとする姿勢を示したり，教師が生徒と共に考え，悩み，感動を共有していくという姿勢を見せたりすることで信頼が強化される。

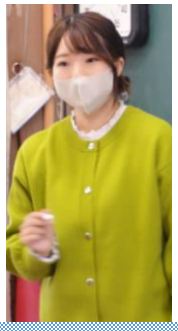
中学校学習指導要領解説 総則編



授業開始まであと２分。
たくさんの先輩方が見ている。
ちらっと、一生懸命に立てた構想に目を落として、
気持ちを整えた。

そして切り替えて、夢中で立っていた４５分。

「な～んか、いつもと雰囲気ちがうな…」
目の前の子供たちは、きっとそう感じていたと思います。子供たちにとって、授業は毎日毎回が大切なものですが、その一時間は、あなたにとっては一層特別な時間になったことでしょう。
授業力向上研修Ⅱは、授業をみてもらう研修です。しかし、それはその一時間のみならず、今の子供たちの姿を懸命に探り、その先の子供の姿を豊かに描き、そのためにどんな力を育んでいきたいのか、必死に考え、願いと子供と教材を見つめてきた、長く濃密な時間になったはずです。
授業を終えた後、ほっと力が抜けるような笑顔が印象的でした。その時、子供たちへの愛情がぐっと膨らみませんでしたか？ 子供たちへ感謝の気持ちが沸きませんでしたか？ 子供たちだって同じです。あなたがそうやって立つ姿が、子供たちからの信頼を厚くしてくれるのだと思います。
教師は子供と共にあります。子供と共にいてこそ、その存在に意味があります。子供への願いをもち、構想して挑み、立っていた自分の姿を、時々思い出してください。いつまでも、忘れないでいて下さい。



立てる。

教師として同期が集い語り合う場では、新卒であっても経験者であっても、立ち止まり、自分自身を素直に見つめ直し、心を一転させ、新しい問いが立つものです。常に熱く実践を語り合い、互いの悩みに耳を傾け、明日を見つめながら語り合い放つ初任者の輝きは、常に新鮮で、重ねていく日々と共に磨き込まれてきた輝きでした。そしてこの輝きは、学び、自分をつくり変え続けていく姿として、きっと、それぞれの場で周囲を明るく照らしてくれているのでしょう。

だからこそ、多くの先生方に支えられていること、子供たちに力を与えられていること、自分が必要とされ、期待されていることに感謝の気持ちをもちながら、その内容も、そのための時間も、この今しかない研修の一年間を大切にしてほしいと思います。自分のこれからの学び方や、周りの先生方との関わり方や、社会人としての生き方もすべて含めて、この一年間が起点となって形作られていくはずです。

そして、一年間磨き合ってきたこの仲間は、いつか同じ学校で出会い、今度は力を合わせていく同僚となるかもしれません。今、同じ立場として語り合える仲間とのこの関わりは、きっとこれから先も心の支えとなって、ずっと立ち続けてくれるはず。そう願っています。

さあ、深呼吸したら、また前を見て立ちましょう。

いよいよ、1月31日は、初任者研修一年間のまとめとなる「1年次プログレス研修」です。
少し時間をかけて一年間を振り返り、2年目につながる成果と課題をまとめていきましょう。

人間はひとくきの葦にすぎない。自然の中で最も弱いものである。
だが、それは考える葦である。

ありのままの人間は，決して完全なものではない。誰の心の中にも弱さや醜さがある。
人間の存在自体，パスカルの言葉の通り，風にそよぐ葦のように儚く弱いものである。しかしながら，同時に，人間はその弱さや醜さを克服したいと願う心をもっている。パスカルは，思考が人間の偉大さをつくると考えた。人間は，総体として弱さはもっているが，それを乗り越え，次に向かっていくところにすばらしさがある。時として様々な誘惑に負け，やすきに流れることもあるが，苦しみに打ち勝って，恥とは何か，誇りとは何かを知り，自分に誇りをもつことができたとき，人間として生きる喜びに気付くことができる。

中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編　より抜粋